

「ノア 約束の舟」



「ノアの箱舟」という言葉に美しいイメージが思い浮かびます。

箱舟に乗ったつがいの生き物を思う時、動物園の楽しさ、オリーブの葉をくちばしにくわえて帰る鳩は、命や平和の象徴、契約の虹は将来への明るい希望や夢を思わせてくれます。

ノアは無垢の人、優しいお父さん、信仰の深い人として、尊敬されています。彼は旧約聖書 創世記に、神の審判である洪水を免れ、祝福を得て、神と人間の新しい関係を結んだ人物として登場しています。

先日、ハリウッド映画「ノア 約束の舟」を見ました。この映画は創世記のノア物語を再構築して、スペクタクルとファンタジーがミックスしたような作品になっています。神が与えた地上の全てを人間は欲望のままに奪いつくし、さらにそのためには暴力が絶えず、他者を殺すという罪の世界に成り果てているというのが舞台設定です。そして、ノアが踏む大地は血に染まっている、ノアは恐怖の中で逃げ隠れしながら必死で生きているのです。

その時ノアは神の声「すべて肉なるものを終わらせる時がわたしの前に来ている。彼らのゆえに不法が地に満ちている。見よ、わたしは地もろとも彼らを滅ぼす。(創世記 6:13)」という声を聞きます。人間は自己中心的だとノアはよく知っているので、滅びざるを得ないと思い、**すべて肉なるものを終わらせる**ことを神のみ心と信じ、受け入れるのです。ただし、神は人間以外のあらゆる生き物のつがいをノアと共に箱舟に乗せ、生き延びるようにとも告げるのです。

この映画では、「地の全てを滅ぼすとの神の裁きの声」が非常に重要なポイントになっていると感じました。聖書ではノアたちも生き延びよと告げていますが、ノアは、やがて自分も家族も滅ぶという覚悟で、生き延びる希望を断ち切って、この仕事を受け入れたのです。ノアは、すべての生き物は、無から生じ、それらは神からのギフトとして、地上に存在すると信じています。



人間であれば、愛し合い、助け合い、新たな命、新たな夢を持って、共に生きていきたいと願います。けれども、他者を自分と同じ人間と見なすことが出来ず、自分が生きたいがため、暴力をもって他者の全てを奪う人間もいるのです。そして、人間は、自分のために、自分の思い、考えで自分の人生を決めるのだと信じる、ノアと闘う人物としてトバル・カインを登場させ、彼は欲望の塊になって、ノアと闘うのです。

スペクタクルとして、自然がよみがえる場面、鳥や動物たちが集まる場面、人間が殺し合う場面、洪水の場面など、リアルに、美しく、恐ろしく、激しく、大きく描かれていて、驚きます。大地が奪われ、痛めつけられていることをもリアルに感じます。面白いのはエデンの園の番人ケルビムが「巨大な岩石でできた軟体動物(?)」のような漫画的姿になって、ノアを助けるという設定です。また、ノアの家族の問題も次々と悩ましく描かれてきますが、人間の生は、美しい部分と醜い部分が絡み合っていることを描いています。

ノアの「絶望の信仰」が、嫁が自分の命の危険をかけて産んだ孫娘を見て、「希望の信仰」に変えられるのが最後のシーンです。人間ですから完全なものはないのですが、それを受容しつつ、祝福の大地を取り戻したいというのが、この映画の訴えている「希望」でしょうか。